

「この坂、どうやってできたと思う？」

私が地理を学ぶ原点になった言葉だ。そのエピソードを紹介したい。

大学生になりたての頃、学科のオリエンテーションという名のバスツアーがあった。これはその年入学した私たちと学科の教授たちとの顔合わせであった。大学教授という人間と相対するのも初めてだった私は、隣に座った教授の話をお聴くも、ほとんど右から左へと流してしまっていた。今思えば、話の内容のレベルに、私の頭が達していなかっただけだろうなと思う。

さて、行き先は吉田郡山城跡。毛利元就の名前しか知らなかった私は、当時その場所に何の思い入れもなく、「あーゆかりの土地なんだなあ」くらいにしか思わなかった。バスから降り、跡地を見学したものの、特に感動は覚えなかった。

再びバスに乗る。自然と席がシャッフルされた。隣に座ったのが冒頭のお言葉を投げた自然地理専門の教授だった。バスが発車してしばらくして、その言葉は投げられた。初めはそもそも坂なんてどこにあったのかさえ気づいていなかった。私は考えた。そんな質問今まで受けたことない。何が答えなんだと。早々に降参した。答えは教えてもらえなかった。ただ、一言、「そういう視点が必要」と補足された。

この言葉で、自分がこれまで積み重ねた知識が役に立っていない。いや、自分が役立てられていないかを思い知った。言葉だけ知って、理解したつもりになっていた。地理は得意だという自負があっただけに、なんだかとても恥ずかしくて、いたたまれない気分になった。

その後、1年生の後期に、その教授の必修科目を受講した。そこで見た地滑りの動画を見て、私は地理を学ぼうと決意した。自分の知らないところで、自分よりもはるかにスケールの大きい地形が動いているというダイナミックさに感動を覚えた。この人についていこう。そう決心した。その年度の終わり、彼は別の大学へと旅立った。一方的に手のひらを返された気分です。2年生を迎えた。

そして2年生の時に会ったのが現在、私が師と仰ぐ先生である。旅立った彼は、私に地理的な見方を教えてくださった。私が師と仰ぐ彼は、地形と人とのかわり方について教えてくださった。本当の地理の楽しさは、大学に入って初めて知った。

今私は、そんな地理の楽しさを伝えることを、一つの目標としている。見方が変われば世界が変わるような自分の経験を伝えたい。だからみんなにも同じことを問う。

「この坂、どうやってできたと思う？」